

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：31307

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520767

研究課題名(和文) 東北地方の天保の飢饉を中心とした非常態と飢饉の記憶に関する研究

研究課題名(英文) A study on life crisis state and memory of famine with a focus on the Tempo famine in Tohoku region

研究代表者

菊池 勇夫 (KIKUCHI, Isao)

宮城学院女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：20186191

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：江戸時代の東北地方は何度か大きな飢饉を経験している。天保の飢饉はその一つである。本研究では被害の大きかった三つの藩、すなわち仙台藩、八戸藩、秋田藩をおもに取り上げた。飢饉の現実に向き合うために、飢饉下における人々の生活困難と生命危機について、全体的な考察を行った。具体的には、米価高騰、米騒動、逃亡、乞食、飢え死に、流行病、などといった問題である。さらに、飢饉の記憶や教訓についても検討を加えた。

研究成果の概要(英文)：Tohoku district of Edo era experienced a big famine several times. Famine of Tempo is one of them. I mainly three of the clan (Sendai clan, Hachinohe clan, Akita clan) took up. In order to approach the reality of famine, about life difficult and life crisis of people under the famine, it was studied in detail. Specifically, it is rice price soaring, rice riot, escape, beggar, starvation, epidemic, and so on. In addition, I have also examined the memory and lessons of the famine.

研究分野：日本近世史・地方史(東北・北海道史)

キーワード：天保の飢饉 非常態 仙台藩 秋田藩 八戸藩 備荒貯蓄 飢人救済 飢饉の記憶

1. 研究開始当初の背景

(1)2011年3月11日に発生した東日本大震災の体験は、それまでの自らの飢饉史研究について省察を迫られる大きな衝撃となった。天明の飢饉を中心とした東北地方の飢饉について、たしかに飢饉下の人々の生命維持やその破綻に目を向けてきたとはいっても、「民衆」という括り、まとまりとしてしか見ていず、一人ひとりの個別の状況、事情にまで検討が行き届いていなかったという思いにかられた。災害は個人、家族、そして地域の体験であって、子細に見ていけばそれぞれ違っているからである。そこに踏み込んでいかなくは災害史研究にならない、そのように意を決し、改めて飢饉史研究に取り組むこととした。

(2)災害史への関心は、1995年の神戸・淡路大震災を画期として高まった。そこには「突発的」な災害への恐怖感があり、関東大震災や安政江戸地震といった大都市の震災が再び注目を浴びることとなった。東日本大震災はさらに拍車をかけることになると思われた。その一方で、凶作・飢饉は突発的ではないために、災害史の後景に退いていくような感があった。災害史といった場合、突発的か否かで区別するのは便宜的なものでしかなく、地震、津波、噴火、火事、洪水、凶作、飢饉、疫病、そして戦争まで含めて、ひろく視野に収めておく必要がある。大震災であれ飢饉であれ、被災民の救済、食料供給や感染症など共通している問題が多いからである。これまで飢饉史に関わってきた者としては、地震・津波研究を新たに始めるより、災害史をひろく視野におきながら飢饉史に拘って研究すべきであると考えた。

2. 研究の目的

(1)近世の東北地方における災害・飢饉のうち、天明の飢饉に匹敵する犠牲者を出した天保の飢饉を中心に、飢饉下で人々が体験した非

常態に関心を向け、飢饉の現実のすがたを具体的に示すことに研究の主眼をおくこととした。天保の飢饉を取り上げたのは、すでに天明の飢饉については科研費一般研究「近世の飢饉に関する民衆生活史的研究」(1988~1990年度)以来、飢饉下の民衆行動、飢饉発生メカニズムなど幅広く研究を積み重ね、自著『飢饉の社会史』(校倉書房、1993年)や『飢饉から読む近世社会』(校倉書房、2003)などにまとめていることと、上記の研究目的を達成するためには、天明の飢饉よりはるかに飢饉史料が残存しており好都合と思われたからである。

(2)被災体験は時間の経過とともに風化し、忘却され「歴史災害」化していく。したがって過去の災害を調べるさいには、文字化された飢饉記録の持つ意味はきわめて大きい。飢饉・災害の記録を残した人は後世に何を伝えようとしたのか、飢饉・災害の記憶をめぐる問題領域にも分け入ってみることとした。飢饉の研究を通して、何をメッセージとして過去から受け継ぎ、それを将来に受け渡していくのか、それが歴史学のはたすべき役割と考えたからである。

3. 研究の方法

(1)本研究を進めていくうえで基本的な前提となるのは、東北地方を中心に天保の飢饉に関する関係史料をできるだけたくさん収集することである。全国の自治体史の史料(資料)編や各種史料集に広く目を通して関係史料を複写によって収集するとともに、文書館・図書館などの史料保存機関に所蔵されている未刊史料をデジタルカメラによって収集することとした。

(2)本研究の方法としてつよく意識したのは、地域社会史的なアプローチである。東北地方だけでも太平洋側と日本海側、あるいは北部と南部とでは飢饉・災害の起こりかたや程度

が異なるので、まず「年代記」と称される記録類に着目して、藩・地域に即してどのような飢饉・災害が起きていたのか把握し、そのうえでそれぞれの藩・地域における天保の飢饉の具体相・非常態を明らかにしていくことにした。

(3) 科研費の期間中に、地域の市民講座等で近世の飢饉について話す機会が増えると想定されたので、その講演・講義と連動させながら、地域史を主体にして、その地域が天保の飢饉などにどのように向きあい、記憶（記録）してきたのかを調べることにし、その成果を地域に還元していくことにした。

4. 研究成果

(1) 3年間にわたって継続的に天保飢饉関係史料の収集を行った。東北地方に関しては各県の主要図書館・文書館を利用したが、それ以外の各県に関しては東京都立中央図書館の自治体史の開架閲覧が多いに役立った。閲覧・収集はほかに北海道、新潟、関東の諸県の図書館等に及んだ。その収集史料を全体として把握するために、活字史料に限定したが、「天保飢饉関係の収集史料リスト」を作成した。関係史料を掲載する図書は自治体史を中心に、全国の約460冊を数える。これによって列島各地における天保飢饉の様相を知ることが可能になり、全国比較のなかでの東北地方の深刻度が明らかとなる。

(2) 地域の災害年表の作成である。藩・地域にはその地で発生した災害など非常のできごと（事件）を年ごとに記載した「年代記」の類がある。これを使って地域における災害の種類、程度、頻度といったことがある程度把握できる。災害の地域史研究の基盤となるような作業である。具体的には、石巻地方の『年代記』（加納家の記録）などを使って仙台藩の災害年表、『八戸南部史稿』を使って八戸藩の災害年表を作成した。また、米など食べ

物の年次ごと、あるいは月ごとの物価変動も凶作・飢饉研究には不可欠なので、上記の『年代記』を使って表示化した。収集した飢饉史料には年代記的なものが全国にわたって含まれているので、今後その比較も行ってみたい。

(3) 飢饉の非常態についてである。仙台藩では天保7・8年が天保飢饉のピーク年となったが、石巻地方の『天保耗歳録』や丸森地方の『飢饉鑑』などを使ってどのような飢饉現象が起きていたのか検討した。米払底による米価高騰が急激な生活の困難・生命の危機を招き、払米、施粥・施薬、松皮餅救助、凶歳凌ぎの雇用、種籾・飯料貸付といった藩による公的救済がみられたものの、他国逃亡、盗人の横行、乞食・物乞、動物食、倒飢死、疫病・痢病流行、などといった非常態がとくに石巻地方に顕著であったことを示した。それだけではなく、餓死に追い込まれていく、一人ひとりの身の上に即して飢饉のリアリティーを追究し、飢饉の犠牲になりやすい当時の貧困家族の実態についても考察を加えた。秋田藩の天保4・5年の飢饉などについても同様の非常態への関心を常に保持しながら研究を進めた。なお、天明の飢饉であるが、米騒動が発生した弘前藩青森町を事例に、米騒動から飢饉へのプロセスを具体的に追跡した論考もまとめた。

(4) 飢人救済論をめぐってである。八戸藩の天保飢饉を事例に公助（藩権力）と共助（地域社会）の関係性を軸に飢人救済がどのように行われていたのか検討した。生存の危機は天保四・五年、天保七・八年、天保九・十年、の三度あったが、は藩権力が在地の共同的な救済機能を吸い上げてまでも強権的に行おうとした救済、ただし、公共的な困稗も一部機能、は豪農商の経済力に依拠しながらも藩権力が主導した救済、は藩権力

の救済が後退し、豪農商中心の内向きの救済、と時期によって救済に働く力が一様ではないことを明らかにした。は権力主導の救済であるが、合意形成なしの強権は農民の一揆を招き成功するものではなかった。同様の構図は天保四・五年の秋田藩においても確認される。

(5) 備荒貯蓄についてである。主として秋田藩を対象にして考察した。秋田藩では寛政期以降備米に本格的に取り組むが、天保四・五年の飢饉ではほとんど役に立たなかった。「貨殖」すなわち貸し付け運用益によって備米を増やしていくという方法だったので、米が貸し出されたままになり、帳簿上は増えていても実際の有米がなく、空蔵状態になっていたからである。こうした天保飢饉の辛い体験から、永続的な備米制度とするためには、金融・利殖に依らず経済活動から切り離して、実米として確保にしておくことの必要性が、つよく認識され、蒸米・蒸糶にして長期保存に耐えられるようにした。この備米によって幕末維新期の凶作・戦争を、餓死者を出すことなく乗り切ることができたと考えられる。備荒貯蓄論について重要な指摘ができたといえよう。また、八戸藩の農書『軽邑耕作鈔』についても飢饉の備えという観点から読み解いた。

(6) 飢饉の記憶と継承についてである。東日本大震災後、近世の飢饉について最初に取り組んだのが、本研究の開始前の「非命・非常の歴史学 近世東北の災害・飢饉史」(東北史学会、2011年10月)という公開講演であったが、それは飢饉体験を「書き残すということ」について考える機会となった。素材としては仙台藩の飢饉史料である、遠藤志峯『荒歳録』(宝暦飢饉) 源意成『飢饉録』(天明飢饉) 遊閑齊宜親『天保日記抜書』(天保飢饉) 芦持僚『春旃夜話』(天保飢饉) など

を取り上げた。いずれの飢饉記録も強調していたのは、時が経つとともに飢饉体験が風化し、忘れたところに大きな変災が襲ってくるということであって、そうならないために古老たちが文字化して後世に伝えておかねばならないという強い思いが込められていた。本研究ではこの点を踏まえ、それぞれの飢饉記録の執筆動機に着目し、さらに飢饉の記憶について考えをめぐらすこととなった。また、近世人の飢饉・災害観をめぐって、災害は天の懲らしめという天罰・天譴観の政治的・社会的意味についても考察した。

(7) 別冊の『研究成果報告書』を発行した。これには、研究期間内に市民講座・研究会などのために作成したオリジナルな配布資料(要旨・史料・図表)を収録した。タイトルをあげておくと、「災害の歴史に学ぶ 八戸地方の災害・飢饉史」(八戸自由大学、2012年2月)、「昌益の思想をどのように読むか 飢饉と貨幣経済のなかで」(安藤昌益資料館、2012年10月)、「近世東北の災害・飢饉史 人々は災害にどう向き合ってきたか」(復興大学公開講座、2013年2月、YouTubeで公開)、『『軽邑耕作鈔』・『遺言』の歴史的価値 飢饉の備えと農業経営を中心に」(軽米町教育委員会、2013年6月)

「近世の飢饉・災害について考える 東北地方(八戸藩)の飢饉を中心に」(國學院大學オープンカレッジ、2013年7月)、「近世東北の飢饉 秋田藩を中心に」(秋田県生涯学習センター、2013年9月)、「広瀬川上流域の近世災害史 村民たちは自然とどう向き合ったか」(仙台市史講座、2014年7月)、「天保の秋田県飢饉と備荒対策」(あきたふるさと講座、2014年9月)、「天譴・天罰論をめぐって」(安藤昌益と千住宿の関係を調べる会、2014年11月)、「南部藩・仙台藩における名子制(解体・存続)と刈分小作 凶作・飢饉への対応を意識して

」(総合地球環境研究所・気候適応史プロジェクト、2014年12月)の10点である。またこの報告書には、上記(1)の「天保に飢饉関係収集史料リスト」も収録した。本研究に関する講座等がほかに数回あるが、内容が重複したり、あるいはパソコン入力していなかったので省略した。これによって上記(1)～(6)の研究のプロセスあるいは内容がわかるとともに、本研究がいつい社会貢献となったことが窺い知られよう。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

菊池勇夫、天保飢饉と備荒貯蓄 秋田藩の場合、宮城学院キリスト教文化研究所『研究年報』、査読無、47号、査読無、2015年、79 - 103

菊池勇夫、飢饉死のリアリティー 仙台藩天保七・八年の飢饉の場合、宮城学院キリスト教文化研究所『研究年報』、査読無、47号、2014、1 - 27

菊池勇夫、飢人救済をめぐる公権力と地域社会 天保飢饉下の八戸藩 (大会報告記録) 歴史科学協議会『歴史評論』、査読無、758号、査読無、2013、61 - 76

菊池勇夫、非常・非命の歴史学 近世東北の災害・飢饉史 (講演記録)、東北史学会『歴史』、査読無、118輯、査読無、2012、26 - 47

[学会発表](計1件)

菊池勇夫、飢人救済をめぐる公権力と地域社会 天保飢饉下の八戸藩、歴史科学協議会、2012年11月17日、早稲田大学戸山キャンパス(東京都)

[図書](計4件)

菊池勇夫、『東北地方の天保の飢饉を中心とした非常態と飢饉の記憶に関する研究』(研究成果報告書) 自刊、2015、210

菊池勇夫、飢饉と災害、岩波講座『日本歴史』第12巻所収、岩波書店、2014、318(283 - 318)

菊池勇夫、弘前藩青森・外ヶ浜の天明の飢饉、菊池勇夫編『地方史・民衆史の継承 林史学から受け継ぐ』所収、芙蓉書房出版、2013、262(177 - 201)

菊池勇夫、救荒食と山野利用 仙台藩の場合、菊池勇夫・斎藤善之編『講座東北の歴史』第4巻所収、清文堂出版、2012、356(237 - 260)

6. 研究組織

(1)研究代表者

菊池 勇夫(KIKUCHI Isao)
宮城学院女子大学・学芸学部・教授
研究者番号：20186191